青鬼調査クラブ 6

遊園地に眠る王を探し出せ！

noprops・黒田研二／原作
波摘／著
鈴羅木かりん／イラスト

PHP
ジュニアノベル

レイカ

北部小学校の五年生。オカルト調査クラブ部長。学校一の美少女だが、オカルト好きで変わり者のため、友だちは少ない。オカルトのことになると周りが見えなくなりがちで、よく幼なじみの優助を巻きこんでいる。

優助

北部小学校の五年生。レイカとは別のクラスだが、幼なじみなので仲が良い。サッカークラブに入っているが、オカルト調査クラブのメンバーとしても活動している。

スズナ

北部小学校の四年生。オカルト調査クラブのメンバー。夜の学校で青鬼から逃げるためにレイカたちと行動を共にし、オカルト調査クラブに入ることを決意。レイカになついている。

ひろし

レイカのクラスメイト。この夏、様々な場所で青鬼に遭遇し、そこで得た情報の一部をレイカに教えた。

タケル

ビション・フリーゼという種類の犬。人間の言葉をすべて理解しているが、バレると面倒なので秘密にしている。

魔尾町現恼（ゲンノウ）

オカルトを中心に研究している民俗学者。青鬼に強い関心を抱いており、夏休み明けから北部小学校・オカルト調査クラブの顧問となった。

たまちゃん

ひとだまのような青い炎を放ち、宙に浮かぶ。レイカたちに協力的だが、その不思議な力を使うためには、大きな代償を支払う必要がある。

6 青鬼調査クラブ

走り書きのメモ ―― 005
まほろば遊園地・地下の見取り図 ―― 006
1 ゲンノウさんの情報 ―― 007
2 遊園地の廃墟 ―― 021
3 時が止まった場所 ―― 036
4 更衣室のロッカー ―― 045
5 ゴロゴロ ―― 063
6 探偵はんぺん ―― 075
7 三体の門番 ―― 083
8 再会 ―― 090
9 食材倉庫の人影 ―― 098
10 『地下の王』 ―― 123
11 《王種》 ―― 132
12 少年の願い ―― 142
13 地下崩壊 ―― 151
14 王を倒す者 ―― 164
15 知識の香り ―― 183
青鬼調査レポート ―― 188
まほろば遊園地・地下の見取り図　その2 ―― 190

走り書きのメモ

NO.

DATE

碧奥美術館の事件は温かくも悲しい結末を迎えた。

わたしは思う。

青鬼のせいで、誰かが涙を流すなら。

わたしは青鬼を倒す。
青鬼の中にいる青い虫をつぶす。

……でも。

今の優助みたいに人間の意識をはっきりと保ったまま、
青鬼化できる存在が他にも現れたら、その時はどうしよう？

もし、そんな存在が青鬼の姿で暴れ出したら？

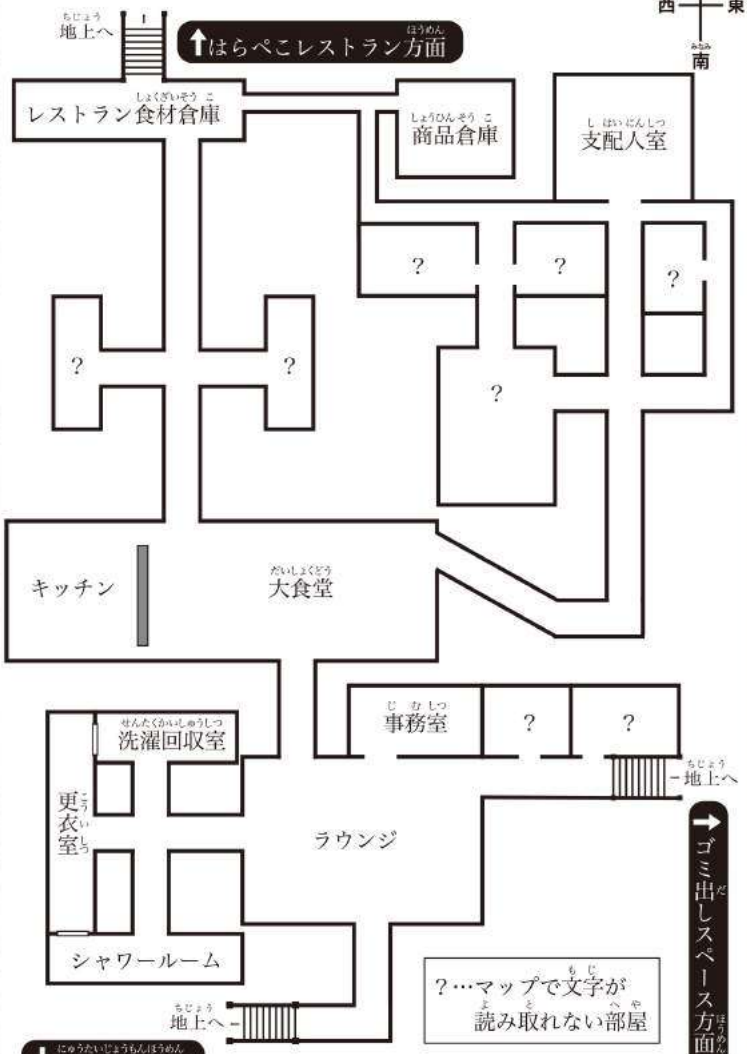
わたしはちゃんと倒せるだろうか？

まだ悩みごとはいっぱいだ。
だけどやるべきことはわかってる。

青鬼をさらに調査すること。青鬼をもっとよく知ること。
それがきっと悩みの解決につながるはずだ。

そのためにも、今日もオカルト調査クラブとして活動を開始する。

まほろば遊園地・地下の見取り図



1　ゲンノウさんの情報

九月四日。

わたしと優助が碧奥美術館を訪れた次の日のことだった。

昨日の夜、オカルト調査クラブのメンバー全員に対して「明日の放課後、部室に集まるように」とゲンノウさんからスマホに連絡があった。調査クラブの顧問になってから、ゲンノウさんがこうした直接的な行動を起こすのは初めてのことだ。

何かあったのは間違いない。

授業がすべて終わり、わたしが調査クラブの部室の扉を開くと、すでに優助とスズナちゃんが椅子に座っていた。ロの字型に置かれた長机の左側に優助、右側にスズナちゃんがいる。

わたしは小さく手を振って二人に挨拶をした。スズナちゃんが手を振り返してくれる。

部屋の奥には、窓から外を眺めているゲンノウさんがいた。

わたしは彼の背中に向かって歩を進めていく。

「――待ちかねたよ、レイカ君」

こちらを振り返らず、ゲンノウさんは楽しそうな様子で言った。
その声色からは隠しきれない興奮が伝わってくる。
「青鬼関係の情報をつかんだんですね」

わたしは確信を持って、ゲンノウさんに声をかけた。
「相変わらず勘がいい。最近はあまり良い情報を入手できていなかったが、今回はおそらく『当たり』だ。キミたちにも早く知らせたくてね」
そう言って、ゲンノウさんはくるりとこちらに向き直った。その瞳は好奇心に満ちており、怪しく光っている。
碧奥港で見た姿と同じだ。怖さを感じるほどのオカルトに対する探求心。それがゲンノウさんの全身からあふれ出していた。呼吸が荒い。気持ちの悪いにやにやした笑みを隠そうとする気配もない。
オカルトのことになると、ゲンノウさんは別人のようだ。
「さあ、座りたまえ」
「ゲンノウさん、一回落ち着いたほうがいいんじゃ――」
「――座りたまえ、レイカ君」
ゲンノウさんは威圧感のある声でそう繰り返した。
わたしは困惑して優助とスズナちゃんに目を向けるが、二人ともため息まじりに首を横に振った。どうやらわたしが来る前から、ずっとこんな調子みたいだ。

とても子どもに接する態度とは思えないが、ゲンノウさんはそもそもまともな大人ではないことを思い出す。
彼は北部小学校の臨時の先生として、オカルト調査クラブの顧問になってくれた。しかし、完全にわたしたちの味方かと聞かれると、うなずきづらいところがある。
オカルトを愛し、何よりも優先する。もちろん、わたしたちの安全よりも。
――それが民俗学者、魔尾町現悩の本質だ。
わたしが入り口から一番近くの席に座ると、ゲンノウさんは満足した表情を見せた。
そして、話を切り出す。
「昨夜、知り合いのテレビ局スタッフから一通のメッセージをもらった」
「テレビ局スタッフ？」
わたしが聞き返すと、ゲンノウさんは補足するように言う。
「ああ。彼は地方局のディレクターだ。地元密着型のローカル番組を多く担当している。過去に彼が企画した心霊番組に出演したことがあってね。それからはたまに情報提供を受けているのだよ」
「なるほど……」

「テレビ局には多くの情報が集まる。もちろんオカルトに関するものも」
「それで、その人からどんなメッセージが来たんですか？」
ゲンノウさんはわたしや優助たちを一度見回してから、ゆっくりと口を開いた。
「――キミたちは『まほろば遊園地』を知っているかな？」
「あ、私、知ってますっ。となり町の紅前町に昔あった遊園地ですよね？」
スズナちゃんが手をあげて答える。
「その通り。まほろば遊園地は二十年前に閉園した遊園地で、現在は廃墟になっている」
「よく知っていたわね！　スズナちゃん」
スズナちゃんが廃墟に詳しいとは思っていなかったので、わたしは驚く。
「お母さんが昔、遊びにいったって話を聞いたことがあったんです」
上手に答えられたことが嬉しかったのか、スズナちゃんははにかんで照れをごまかすように自分の前髪をいじった。
その可愛らしい様子を見ながら、わたしは少しだけ苦い顔をする。
まほろば遊園地。
わたしもその場所のことは知っていた。

元々、とてもにぎわっていた遊園地だったらしい。
しかしゲンノウさんも言っていた通り、二十年前、突如としてまほろば遊園地は閉鎖された。
それはとある一つの奇妙な事件がきっかけだった。

——ある日、お客さんと従業員が約二十人も行方不明になったのだ。

その後、まほろば遊園地は事件調査のために休園となり、二度と営業が再開されることはなかった。
碧奥美術館に展示されていた呪いの絵画『青の悪夢』と似たようなケースだ。
いわくつきの遊園地。妙に興奮しているゲンノウさん。十中八九、今回の話には青鬼が関係しているだろう。
ゲンノウさんは再び話しはじめる。
「メッセージをくれたディレクターは数日前、まほろば遊園地でローカル番組の撮影をおこなっていたんだ。今、流行りの……なんとかという芸人が廃墟探索をする内容だったようだが、スケジュールの関係で昼間しか撮影ができず、残念ながら霊的な現象をカメラに収めることはできな

かったらしい」
そのゲンノウさんの言葉にスズナちゃんは首をかしげる。
「それって、結局何もなかったってことじゃないですか？」
「ああ、そうだ。ここまでは私としても退屈な話でしかなかった。だが面白くなるのはこの後なのだよ」
ゲンノウさんは大きくにやりと口元をゆがめた。
「この後……？」
スズナちゃんはきょとんとする。
「まあ、そう焦らずに聞くといい。そのディレクターの話だと、廃墟には特にオカルト的な気配はなかったらしい。ただの古びた遊園地跡だったと聞いた」
遊園地の廃墟などの大きな施設は、普通の建物よりも不気味だからか、心霊スポット扱いされることが多い。しかし実際はオカルトと関係ないことがほとんどだ。
まほろば遊園地に幽霊が出没する、というウワサも今まで何度か聞いたことがあった。
だけど耳にしたいくつかの話は内容がどれもバラバラだった。もしウワサが本当なら内容は同じようなものになるはずだ。だから、まほろば遊園地のウワサは単なる見間違いや怖がらせるた

めの作り話だとわたしは思っていた。
ゲンノウさんは話を続ける。
「ディレクターは撮影を終えた芸人やスタッフたちを先に帰し、何かオカルト的なものが見つからないか、と一人残って園内をぐるりと回った。しかし何も見つからず、あきらめて帰ることにした」
そこで一度、言葉を切ったゲンノウさんはゆっくりと核心部分へと迫っていく。
「思ったよりも遅い時間になってしまい、ディレクターは少し駆け足気味に入り口付近まで戻った。その時だ。**ギイイ……！** と重い金属同士が擦れる音を彼は耳にした。音がした方向に目をやると、そこには小さな鉄の門があった。来た時にはしっかりとカギがかかっていたはずのその門は、なぜか少しだけ開かれていたらしい。門の横にはプレートが掲げられていて、そこにはずいぶんとかすれた文字で『従業員専用エリア』と書かれていた」
優助とスズナちゃんの顔がだんだんと青白くなる。
「な、なんだか怪談を聞いてるみたいだな」
「そ、それでどうなったんですか？」
わたしは無言でゲンノウさんのことをまっすぐ見つめていた。こちらから質問しなくても、彼

が勝手に続きを話してくれることは明らかだった。
「ディレクターはその鉄の門の間から、まるで自分を招いているかのような、冷たくて重い空気が流れ出してきていることを感じたらしい。そして彼が目をこらして、門の奥をよく観察すると……」
——青鬼がいた。
おそらく、そんなオチだろう。
わたしはそう予想していたのだが、ゲンノウさんの口からは意外な言葉が飛び出した。
「門の向こうに——うっすらと青いひとだまが見えたそうだ」
「っ!?」
思わず息をのむ。
青いひとだま。その正体には心当たりがある。
「驚いたディレクターは逃げるようにあわててその場を後にした……というのが、私に寄せられた情報のすべてだ。せっかく探していたオカルト的な存在に出会えたというのに、彼は怖くなって、結局他のスタッフに話せず、私に連絡してきたらしい」
「……青いひとだまが遊園地に?」

わたしは考えを整理するように、ぽつりとつぶやく。
「ドクロ島での事件の後、別れたきりのたまちゃんの可能性があるかもしれないわね……」
「どうだい？　この情報はお気に召したかな、レイカ君？」
「ええ、気になります」
わたしはうなずいた。
「ということは、まほろば遊園地の廃墟に行けば、たまちゃんに会えるってことでしょうか？」
目を輝かせてそう言ったのはスズナちゃんだ。
「でもスズナちゃん、きっとそう簡単にはいかないわ。たまちゃんが意味もなく、そんな場所にいると思う？」
わたしが言いたいことを理解した優助が、はぁ……とため息をつく。
「二十年前の突然の閉園。お客さんたちの失踪。それにひとだまときたら、青鬼が事件に関係してるかもしれないな。もしかしたら、今も遊園地に青鬼がいるかもしれない。誰もいない廃墟なんて、青鬼がいかにも好きそうな場所だし」
「青鬼が、ですか……。じゃあ残念ですけど、まほろば遊園地には近づかないほうがよさそうですね」

「――いいえ、スズナちゃん。わたしは行かないとは言ってないわ」

「……え？」

わたしは碧奥美術館の出来事を経て、リコさんとそのアシスタントさんの前である宣言をした。

いい機会だ。スズナちゃんとゲンノウさんにも話しておこう。

「あのね、実は昨日、碧奥美術館で――」

そうして、わたしは幽霊のリコさんと青鬼になってしまったアシスタントさんの話をした。とても悲しくて、そして最後は温かく消えていった二人の話を。

その間、スズナちゃんとゲンノウさんは静かに話を聞いてくれた。

「――わたしは青鬼を、そして青鬼化の原因である青い虫を退治すると決めたの」
「そんなことがあったんですね……」
「だから、行く。たまちゃんのことも気になるし、わたしは青鬼の調査をしなくちゃいけないから」
わたしの言葉を聞いて、優助とスズナちゃんは真面目な顔になる。
「俺はレイカについていく。幼なじみの俺がいないと、レイカはすぐ暴走するからな」
「わ、私もレイカちゃんのサポートをします！　あんまりお役には立てないかもですけど……レイカちゃんと一緒にいたいです！」
その様子を見ていたゲンノウさんはくっくっくと声を押し殺して笑う。そしてそれはだんだんと激しさを増し、最後は大きな笑い声に変わっていった。
「ハッハッハァ！　最高だよ、レイカ君。やはりキミと行動を共にしようと決めた私の選択は間違っていなかったッ！　では行こう、三人とも！　今すぐ！　まほろば遊園地のある紅前町へ!!」
テンションが最高潮になったゲンノウさんだったが、わたしを含む三人は「あっ……」と顔を見合わせて、しぶい表情になる。

「どうしたのかね？　全員の意思が同じなら、早く行こうではないか！」
申し訳なさそうな様子でスズナちゃんが答える。
「今からとなると、紅前町に着くのは夕方頃になっちゃいますよね？　あの、その……最近、青鬼関係の事件で帰りの時間が不規則になったことが何度かあったので、お母さんから夕方以降の外出はやめるように言われていて……」
優助も同意するようにうなずく。
「俺なんか一日家に帰らなかったせいで、まだ父さんに怒られることがけっこうあるんですよ……」
「わたしも遅くまでの外出はお母さんに禁止されたんだった……」
ゲンノウさんと違い、わたしたちはまだ小学生だ。
青鬼と同じくらい両親も怖い存在だった。
今までは誰かの命が危険にさらされている状況だったので、門限を破って怒られるのは覚悟のうえだった。けれど、今回はすぐに誰かが青鬼に食べられてしまうわけではない。そうなると、あまり無茶できないというのが正直なところだ。
「ゲンノウさん、調査は今度の休みの日に――」

わたしが日程の調整を提案しようとすると、

「――なんだ、みんなそんなことを気にしていたのか」

ゲンノウさんは言葉をさえぎり、わたしたちの悩みを「そんなこと」と軽く流す。そして、ドン！　と右手で作った拳で自分の胸を叩いた。

「そういう頭の固い大人たちを言いくるめるのは、私の得意分野だよ。どれ、それじゃあ、今から三人の家を回って全員の親を説得してみせよう。課外授業の一環としてすぐに外出許可をもらえるはずだ」

どこからそんな自信が湧いてくるのか知らないが、オカルト関係で本気になったゲンノウさんの力には目を見張るものがある。

なんだか本当に許可が下りそうな予感がしてきた。

「では、さっそく出発だ。そうだな……まずはレイカ君の家からにしようか」

ゲンノウさんの瞳が獲物を狩る肉食動物のようにギラリときらめく。

そうして、ゲンノウさんによる突然の家庭訪問が始まったのだった。

2　遊園地の廃墟

本気のゲンノウさんはすごかった。

収まらない熱気をまとった彼は、わたし・優助・スズナちゃんの家を順番に回って、各々の親から今日の夜、課外学習をおこなう許可を見事に勝ち取ったのだった。

わたしたちは「オカルト」ではなく、「生物」調査クラブに所属していることにされ、となり町で今しか見られない珍しい生物が見つかったので、ゲンノウさんの引率で今夜さっそく観察をしにいくという話になっていた。

……まあ、ある意味ではたまちゃんや青鬼も珍しい「生物」には違いないので、ゲンノウさんはウソをついているわけではないけれど。

彼はさっき部室で見せた危険な笑みとは正反対の人当たりの良い笑顔を浮かべ、物腰も柔らかに各家庭を回っていった。

完全によそ行きの振る舞いだ。

だがそのおかげで、みんなの親からの信頼をやすやすと得ることができていた。

学校の臨時教師という立場も、信用される大きな理由の一つだったのだろう。ゲンノウさんはその立場をフルに活用して、子どもたちになんとか貴重な学習の機会を与えたい、と真剣な態度で説得した。そうして見事、わたしたちは今夜外出することができるようになったのだ。

「わたし、夜にオカルト調査に出かける時は、お母さんに見つからないように毎回必死なのに。なんだかくやしい」

「そう言うなよ。おかげで今夜は、堂々とまほろば遊園地を調査できるんだぞ」

納得がいかないわたしを優助がなだめる。

「ハハ、優助君の言う通りさ。よく感謝したまえ、レイカ君！」

ゲンノウさんはもうはしゃいでしまっていて、軽い口調で挑発してくる。

「反応しちゃダメですよ、レイカちゃん。あの人は元からああいう残念な人なんですから」

「……わかってるわ、スズナちゃん。ほら、ゲンノウさん、ちゃんと前を見て歩いてください」

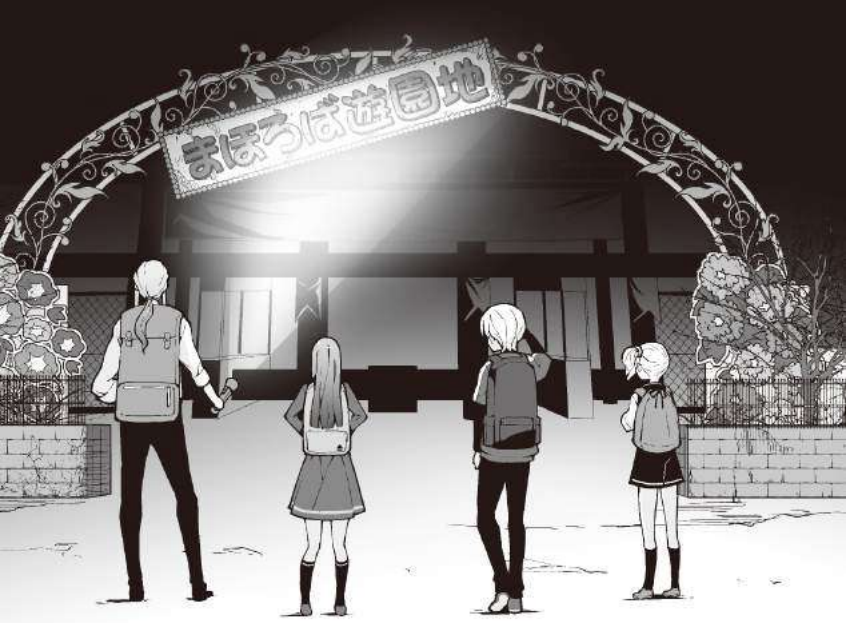
わたしたちは電車を使い、となり町である紅前町の駅で降りたところだった。

全員の家を回ってから対青鬼用の道具の準備をしたため、周囲はもう完全に暗くなっている。

腕時計を見ると、午後八時を過ぎていた。こんな時間に許可をもらって外にいるのは不思議な感じだ。

「それにしても、何もない場所ね」
駅から一歩外に出ると、ぽつぽつと古い建物があるだけでとても静かだった。飲食店やコンビニなどは見当たらず、歩いている人も発見できない。
「こんな場所に本当に遊園地があったのか？」
不安そうな表情で優助が言う。
「ここから山に向かって二十分。田舎道を直進したところにまほろば遊園地があるらしいわ」
「二十分!?　なんでそんな遠いところに!?」
わたしはきょろきょろと辺りを見回す。すると、近くにさびた看板があるのを見つけた。
「ほら、これを見て」
わたしはそう言って指をさす。そこには『まほろば遊園地行き』と書かれたバス停らしき看板が、みんなに忘れられたようにぽつんと立っていた。
スズナちゃんが看板をじっくりと観察する。
「なるほど。昔は駅と遊園地を行き来する専用のバスが走っていたんですね。バスなら歩いて二十分の距離でもすぐ移動できると思います」
「遊園地を作るにはかなり広い土地がいるわ。山間の安い土地を買い取って遊園地を作ったか

ら、駅から遠くなったんじゃないかしら」
優助はようやく納得したようにうなずいた。
「そういうことか。遊園地を作るのも簡単じゃないんだな」
「そんなことはどうでもいいじゃないか！　さあ、早くまほろば遊園地を目指そう！　青いひとだまや青鬼が私たちを待っている!!」
ゲンノウさんがうるさい。
ほとんど人がいないとはいえ、駅前で騒ぐのはあまり良くないだろう。ゲンノウさんを落ち着かせるためにも、わたしたちは足早に遊園地へと続く一本道を歩きはじめた。
駅から離れると、次第に街灯が少なくなっていく。周囲の風景は古びた建物から田んぼへと変化して、薄闇がわたしたちを包みこむ。
しかし、暗い場所での活動はもう慣れたものだ。
わたしたちはスマホのライトや懐中電灯で道を照らす。しっかりと準備をしていたおかげで、道中で特に困ることもなく、わたしたちはまほろば遊園地まで歩を進めることができた。
ホコリのにおいがした。



まほろば遊園地。

かつてたくさんの人々を笑顔にしたであろう、その巨大な遊園地はひどくさびれていた。

当然だ。二十年間、まったく使われず、解体されることもなく、ただ残されたアトラクションの数々は今も眠ったまま、あの頃の夢を見続けている。

わたしたちは大きな遊園地跡をしばらく見上げた後、本来ならチケットを買うことで初めてくぐれるはずの入退場門をするりと通り抜ける。

「なんだか、悪いことをしてるみたいです……」

「実際、管理会社に黙って中に入るのは、

あまりいい行為ではないわね……」
わたしとスズナちゃんが顔を見合わせ、二人でちょっと居心地悪そうにしていると、
「ハハハ、私を見くびらないでもらおうか。スズナ君辺りがそういう細かいことを気にすると思って、事前にここの管理会社の許可を取っておいた。だから、余計なことは気にせず調査に集中するといい」
と、背後からやってきたゲンノウさんが笑った。
「ほ、本当ですか？」
スズナちゃんは驚いたように目を丸める。
「本当さ。やりとりのメールもきちんと保存してある。ここで見せることもできるが、必要かな？」
「い、いえ……。そこまでは疑ってません。ありがとうございます」
いつもは嫌っているゲンノウさんに心配事を先回りで解決され、スズナちゃんは動揺しているようだ。ゲンノウさんはオカルト関係になると、本当に抜け目のない人間に変化する。それはもう普段とは別人と言ってもいい。
何はともあれ、不安要素がなくなったのはいいことだ。

ゲンノウさんが事前に手を回してくれたおかげで、わたしたちは園内の調査を心置きなくおこなえる。ちゃんと感謝しておくべきだろう。

……口に出すと調子に乗りそうなので、あくまで心の中でだけども。

「それで、情報にあった『従業員専用エリア』の鉄の門っていうのはどこにあるんだ？」

ライトを片手に、周囲を調べていた優助がつぶやく。

「話では入退場門をくぐって、すぐの場所にあるはずだが、近くに見当たらないかね？」

ゲンノウさんは優助と一緒になって、ライトをいろいろな場所にかざす。当然、今のまほろば遊園地には明かりなど存在するはずがなく、闇の中で完全に手探りの状態だった。

「む、この辺りが怪しくはないか？」

しばらくして、ゲンノウさんのライトが入退場門を入って右側、通りから少し外れた場所を照らし出す。

そこには小さな鉄の門があった。

建物の裏に隠されたようにぽつんと配置されている。これから遊園地を楽しむお客さんの目にあまり触れないように、という配慮だろうか。

門はボロボロにさびていて、薄気味悪い雰囲気を放っている。

両開きの門は完全に開いているわけではなく、ほんの少しだけ、左右の門が手前側に開いて奥が見える状態になっていた。
ゲンノウさんが言っていたディレクターさんは、このすきまから青いひとだまを見たのだろう。
「ずいぶんと不気味な感じがするな……」
優助がごくりとつばを飲みこむのがわかった。
「レイカちゃん……」
心細そうに小さく身体を震わせたスズナちゃんが、わたしの左手をぎゅっと握ってくる。
今回はわたしもほんのちょっと恐怖心があった。
どんなオカルトにだって興味はある。
だがもしあの向こうに『何か』がいるのだとしたら、それは美術館の時に出会った楽しいお化けたちとは違って、人に危害を加える悪霊のたぐいのような気がする。そう思ってしまうほど、暗くて重い空気が辺りに満ちていた。
しかし、ゲンノウさんはそんなことお構いなしに、スタスタと鉄の門へ近づいていく。
「む？　どうしたのかね、三人とも」
ゲンノウさんにおびえた様子はない。オカルト民俗学者としてこういう場所をたくさん見てき

たからなのか、単に青鬼のことしか考えていないからなのかはわからない。だが少し頼もしかった。

ゲンノウさんは鉄の門の脇に掲げられたプレートにライトを当てる。プレートにはかすれた文字で『従業員専用エリア』と書かれていた。

「どうやらここで合っているようだな。では先に進もうじゃないか」

ゲンノウさんはそう言って、ためらいなく門を通り抜けていく。どんどんと先に進んでいくので、わたしたちだけ怖がってその場にとどまるわけにもいかなかった。

無理やり引っ張られる形でわたしたちはゲンノウさんの後を追う。

わたしはスズナちゃんの手を引いて鉄の門を通り抜けた。すでにゲンノウさんの背中は闇の中に消えている。そのままわたしたちを置いて先に行ってしまったのかと思ったけれど、少し進んだところで、ゲンノウさんは立ち止まっていた。

しかし、わたしたちを待っていた……というわけではなさそうだ。

彼はあごに手を当てて、目の前に広がる光景をもの珍しげに観察していた。

「興味深いな、地下施設か」

ゲンノウさんの言葉を耳にしたわたしは、スズナちゃんとつないでいた手をそっと放して、彼

の横に立つ。

正面には地下へと続くコンクリートの階段があった。

たくさんの雑草が階段のいたるところに生えている。緑色の植物たちに侵食された階段の先は

真っ暗で何も見えない。
今回の調査場所――まほろば遊園地の廃墟は全体的に不気味な気配がただよっている。鉄の門もそうだし、目の前の地下への階段もそうだ。嫌な雰囲気にずっと背筋がゾワゾワしている。
しんと静まり返って、肌寒い地上。
わたしたちを暗闇へといざなう階段。
お化け屋敷などをはるかに超える恐怖がそこにあった。
その証拠にスズナちゃんはさっきから涙目になっている。
優助だって必死に隠しているけれど、わたしから見れば怖がっているのがバレバレだ。
しかし、わたしはオカルト調査クラブのリーダーとして、みんなよりも前を行かなければならない。みんなが怖がっているのなら、なおさらだ。
わたしはゲンノウさんよりも先に階段へと進む。スマホのライトを使って、足元をしっかりと照らしながら階段を下りていった。足をすべらせて怪我でもしたら大変だ。
次第に外の冷たい空気は薄れ、代わりにカビくさくて、どんよりとしたぬるい空気がわたしの身体を包む。
この先は長い間、誰も入っていなさそうな空間だ。青鬼がいきなり現れておそわれる可能性も

ある。今までは施設の不気味さにばかり気を取られていたが、ここからはもっと注意深く行動しなければならない。

しばらく階段を下りていくと、やがて狭い地下通路へと出た。

その通路はすぐに左へと曲がっていて、わたしは警戒しながら、そっと曲がり角の先をのぞく。

すると、そこには思っていた以上に広大な空間が広がっていた。

「ここって……もしかして、かなり広い？」

「あっ、ちょっと待ってくださいね」

後ろからやってきたスズナちゃんが、背負っていたバッグからランタン型の大きなライトを取り出した。

「これ、けっこう重いので必要な時までしまっていたんです」

そう言ってスズナちゃんが電源をつける。すると、ぶわっと周囲が一気に明るくなった。

同時にわたしは息をのむ。

「こんなに地下が広がっているなんて……驚きだわ」

従業員専用のエリアと聞いていたので、そこまで広い場所ではないと予想していた。従業員の人たちが制服に着替えたり、ちょっと休憩できるくらいの狭い空間だろう、と。